

G.M. ホプキンスのカトリックへの道

—「ナイチンゲール」を通して—

寺本明子*

(平成21年8月5日受付/平成21年12月4日受理)

要約：産業革命により19世紀英国社会は未曾有の経済的繁栄を成し遂げたが、反面、社会構造に歪みが生まれ、負の遺産とも言うべき影響を、一般社会のみならず宗教界にも与えた。こうした社会情勢の中で1833年に始まったオックスフォード運動は、宗教界の体質改善を求め、英国国教会の惰眠状態を改革しようとするものであった。結局この運動は挫折したのだが、1863年にオックスフォード大学に入学したジェラード・マンリー・ホプキンス (Gerard Manley HOPKINS) は、在学中、かつて運動の立役者であったピュージーやリドンの影響を受け、更に、カトリックに改宗したニューマンの著書を通して自身の信仰を見直すこととなった。そして彼は、1866年にニューマンの導きでカトリック信者となり、後に、カトリック修道会の中でも一番厳しい信仰生活を求めるイエズス会に入る。

ホプキンスの改宗前の初期の詩は、英国国教会の家庭に育った素直な信仰を謳うものから始まり、次第にカトリック改宗に向けての彼の信仰上の苦悩が表れるようになる。その中の一つ“The Nightingale”を精読することによって、船乗りの夫を海で亡くす妻の姿を描きながら、国教会との決別を意識するホプキンスの心情を読み取る。

キーワード：産業革命, オックスフォード運動, カトリック信仰, 改宗, ナイチンゲール

ルネサンスに始まった人間中心主義に源を持つ科学精神の実利的結晶である産業革命によって、英国は19世紀前半には未曾有の国家的繁栄を成し遂げ、世界にヘゲモニーを唱えた。同時に、それは負の遺産も生み出し、英国の社会構造をも覆し、諸々の社会問題を引き起こした。この激動の時代は、英国人が拠りどころとする心や精神構造にも大きな影響を与え、彼等の運命をも翻弄した。大規模な産業構造の急変は、単にその現象には留まらず、そこを震源として幾重にも波紋を広げ、周辺部に大なり小なりの影響を与える。19世紀英国社会においても、科学精神の流布と相俟って、経済思想や社会科学、宗教界に不穏な影が及んだ。言葉を換えると、この時代の科学と宗教は、互いに牽制する一方で、相互に働きかけながら、生成したのである。

1833年にジョン・キーブル (John KEBLE) がオックスフォード大学で行った説教「国民的背信」(“National Apostasy”)と、1859年出版のチャールズ・ダーウィン (Charles DARWIN) の『種の起源』(On the Origin of Species 1842年草稿) は当時の英国社会に大きな衝撃を与えた。後者の自然淘汰説が投げかけた波紋は、それ以降の自然科学に留まらず、社会科学や経済思想、人文学や宗教にも及んだ。他方、前者の「国民的背信」は、敬虔な国教会の牧師で、詩学教授として母校に迎えられたキーブルが行った説教で、「オックスフォード運動」の引き金となった。ヘンリー8世 (HENRY VIII) の英国宗教改革 (English Reformation) には、既に薄々疑問を感じる人々がいたが、

国家により、教会が持っていた「審査律」の特権やアイルランド教区の一部が廃止されるに及んで、キーブルは、宗教に対する国家のこれ以上の関与を否定し、神聖であるはずの宗教問題に国が手を出すことを容認することは、全国民揃っての背信行為であると断罪し、真のキリスト者は、国家の暴挙に反対して立ち上がらなければならないと主張した。そして、英国国教会を宗教本来の姿に戻そうとするオックスフォード運動から、更に「信仰の正統性とは何か」という課題へと推移していくのは、当然のことであった。もともと英国国教会の聖職者であったジョン・ヘンリー・ニューマン (John Henry NEWMAN) ですら、結局、論理の一貫性を求めて1845年に「プロテスタンティズムという愚にもつかない矛盾に満ちたもの」を捨てローマ・カトリックに改宗し、人々に強烈な衝撃を与えたのだ。

ホプキンス (Gerard Manley HOPKINS 1844-89) のオックスフォード大学ベイリオルカレッジ入学当時、宗教的には、オックスフォード運動が挫折し、ラショナルイズムの再興を許していた。しかし、オックスフォード運動の立役者であったピュージー (Edward Bouverie PUSEY) やリドン (Henry Parry LIDDON) はホプキンスに影響を与えた。また、ニューマンの赤裸々な心の推移を告白する『アポロギア』(Apologia Pro Vita Sua 1864年) が出版されると、そこに示された彼の紛れもない真摯さと率直さが、再び多くの人々に深い感動を呼び起こした。ホプキンスが1864年に書いた自分の詩3篇を「とてもカトリック的」と呼んで

* 東京農業大学応用生物科学部教養分野

いることからニューマンに受けた影響が窺われる。こうした環境の中で、ギリシャやラテンの古典学に没頭していたホプキンスと周りの学友達の中にも、もう一度自分の信仰を見つめ直してみようという機運が起こっていた。

Hopkins was inevitably caught in the obscure spiritual eddies of Oxford and helplessly found himself drifting—he did not know whither¹⁾.

ホプキンスの生涯は、葛藤に満ちたものであった。それは、彼の生真面目で妥協を許さない性格から来ているのだろう。何事も几帳面で精確を極め、人並み外れた克己心を持ち、禁欲への憧れも人一倍であった。司祭としての信仰生活の中で、彼は詩作という美の追究を捨てきれず、辻褄を合わせようとしたり、自己嫌悪に陥ったりしながら、そうした限界にあればこそ生まれる数々の珠玉の詩を残した。独自の斬新な詩の形式にしる、神への魂の叫びと言える内容にしる、彼の内的世界の吐露そのものである。いつもひたすらまっすぐに神を求めて生き、自分に正直に最善の道を選び取る内、自然に生まれたものばかりである。それを緒方登摩は、「詩人としての天性と宗教的な体験の見事な結合」や「彼が生涯を捧げたイエズス会の体質と詩人の本質との間の違和感、そしてそれにとまなうホプキンスの敗北感」から来る「無意識的的革命性」であると述べている²⁾。

彼の詩作は少年時代に始まるが、カトリックへの改宗後、一際厳しい修道会であるイエズス会に入り、詩作を離れ総てを神に捧げる決意をし、「罪無き幼児の大虐殺」(Slaughter of the Innocents) と呼ばれるように、それまでの作品の大半を焼き捨てて詩に別れを告げた。そして、7年間の‘elected silence’の後、上長の許可の下に「ドイッチェランド号の難破」(“The Wreck of the Deutschland”)の詩作を開始した。これには、イエズス会の創立者イグナチウス・ロヨラ (Ignatius LOYOLA) の『靈操』(Spiritual Exercises) の影響が大きい。つまり、神に仕えることと詩作を関連付けることができたのである。カトリックの秘跡とは、具体的な存在の中に神の恩寵を見出すことであり、個々の事物の「インスケーブ」こそが神の存在の証であるというホプキンスの思想はロヨラの教えと合致するように思われ、その後次々と湧き出るように詩が書かれた。そして、1877年に多作された明るい信仰詩であるブライトソネットを経て、アイルランドで疎外感を感じつつ苦しみを吐露したダークソネットに至る。イエズス会において、詩を書く自分を引け目に感じ、詩を書くよりも大切なことがあるのではないかと悩み、「美」を追いかければ追いかけるほど、人や自然の個性に惹かれることへの罪悪感を覚え、しかし、神への訴えを詩に託すしかないという状況であった。実際、『靈操』には二面性があり、「詩人の心に確信がある限り、詩を生み出す積極的な力になることができるが、詩人の心にいったんためらいが生ずると、詩に対する抑圧となる性質」を持つのであり、このことが彼の「確信」→「ためらい」→「反逆」という詩境の展開を招いた³⁾。

少年時代の詩は、ハイゲートの中高等学校で詩の賞を獲得した「エスコリアル」(“The Escorial”)に始まる。スペインの宮殿を舞台にしたこの壮大な詩には、まだ宗教的な色彩が見られない。初期の詩は、いかにも少年らしい単純な明るさから出発し、次第に、英国国教会高教会派の家庭に育った彼らしい純粋な神への想いが謳われるようになる。これらが「彼の詩人としての生涯のいわばプレリュード」⁴⁾であると言われるのは、彼の人生にその後付きまとう葛藤が表れていないからである。

He hath abolished the old drouth,
And rivers run where all was dry,
The field is sopp'd with merciful dew.
He hath put a new song in my mouth. . .
(“He hath abolished the old drouth,”)

I have desired to go
Where springs not fail,
To fields where flies no sharp and sided hail
And a few lilies blow.

And I have asked to be
Where no storms come,
Where the green swell is in the havens dumb,
And out of the swing of the sea.
(“Heaven-Haven”)

しかし、カトリック改宗前の初期の詩の中でも、その後、段々と趣が変わって来る。それは、カトリシズムに傾く微妙な彼の心情の変化を映し出しているからであろう。ホプキンスは、1866年7月にカトリック改宗を決意し、オックスフォード出身者で国教会からの改宗者であるニューマンの導きで10月21日に洗礼を受け、正式にカトリック信者として受け入れられるが、1865年夏にベネディクト会の修道院を友人アディス (William E. ADDIS) と訪れ、フランス人修道士と出会って話をしたことで、2人とも国教会から心が離れたというアディスの記述があり、ホプキンスの改宗に関しては、「長い間の準備期間」⁵⁾があり、65年秋には「沈黙の改宗」をしていた⁶⁾と考えられる。ホプキンスは、生来の潔癖主義から、自らに禁欲的な生活を課するのだが、これもその後の、信仰の正当性を追究しようとするカトリック改宗につながるものと言えよう。

Nov. 6. On this day by God's grace I resolved to give up all beauty until I had His leave for it. . .⁷⁾.

For Lent. No pudding on Sundays. No tea except if to keep me awake and then without sugar. Meat only once a day. No verses in Passion Week or on Fridays. No lunch or meat on Fridays. Not to sit in armchair except can work in no other way. Ash Wednesday and Good Friday bread and water⁸⁾.

更に、マッケンジー (Norman H. MACKENZIE) は次のように断言している。

At Oxford his[Hopkins'] doubts concerning the

validity of the Church of England, of which he was a most conscientious member, increased month by month. Many of his friends were torn by similar fears and questionings, as generations of Oxford men had been since the days of Newman's dramatic conversion to the Roman Catholic Church twenty years earlier. The spiritual gloom through which Hopkins was passing was reflected in his poems of 1865 and 1866. However we may attempt to explain it, we must admit a surprising degree of affinity in tone (though with significant differences) between the expression of his struggle of soul during his Oxford days and his last poems written in Ireland⁹.

この流れからも、1866年1月18、19日付けの“The Nightingale”はその頃の彼の心情を物語の形式に託して吐露しているものであると言えよう。

まず“The Nightingale”の物語を追えば、この作品のテーマは、「愛と死の悲哀であり、ワーズワース (William Wordsworth) の「ルツ」 (“Ruth”) やディクソン (Richard Watson Dixon) の「愛の慰め」 (“Love's Consolation”) に見られるように、その効果は、自然の力によって増して」いる¹⁰。季節は初夏、朝日が姿を見せようとする東の空。一面が真紅に染まる明け方は、その日の好天を約束するものではなかった。仕事で海に出掛ける夫を妻は見送るつもりだったが、少しまどろんでいる内に、彼は出掛けてしまった。その夫の力を待ち受けていたのは、海鳴りのする荒天の海。そう言えば、明け方近く、ナイチンゲールの一際かん高い鳴き声で目が覚め、聞き耳を立てさせられたが、その鳴き声を聞くのが怖かった、と妻フランシスは思い出す。海が荒れる音を耳にしながら暫し床に就くが、夫が船の甲板から海に投げ出されるその時、彼女はその場面を悲しい夢に見る。マリアーニ (Paul L. MARIANI) も ‘quasi-ballad narrative in the worst tradition of mid-Victorian melodrama’¹¹ と述べるように、これは男女についての詩であるが、しかし、ホプキンスはそれだけには留まらず、その頃の彼の心情をこの詩に託していると考えられる。雑木林は灰色とは言え、一晩中、暗くはならなかったとあるように、高緯度の英国風土を思わせ、南の国からの渡り鳥であるナイチンゲールが英国に飛来するのは4月中旬以降であり、その雄が昼夜を問わず鳴くのは5月中旬頃までとされており、さらに、ケシは5、6月頃に花を咲かせる。この英国南部の夏に向かう情景は、作品に記された1月18、19日という日付から考えると、ホプキンスの目の前に広がるものではなく、彼の想像上の光景であり、そこに彼の詩作の意図が感じられよう。

不気味な夜明けの情景から始まるこの物語詩は、七行連 (seven-line stanza) から成り、長短の行を巧みに用い、変化のある rhyme scheme と相俟って、危うい先行きを暗示する。

‘From nine o'clock till morning light

The copse was never more than grey.
The darkness did not close that night.
But day passed into day.

And soon I saw it shewing new
Beyond the hurst with such a hue
As silken garden-poppies do.

まず、一晩中灰色の雑木林は、夜の完全な暗闇が訪れず、夕暮れのまま翌朝を迎えるという非常に曖昧な光である。これは、当時のホプキンスの心境、つまり、国教会からカトリックへと向きつつある彼の心の迷いを表すのであろう。(実際、カトリック教と英国国教会とは、職階の名称こそ違え、本質的に大きな差異は無い。)彼の家族は熱心な国教会信徒であるから、改宗には大きな反対が予想され、また、様々な葛藤を越えて改宗の決心に至るまで1年程の時間を費やしたと本人も言っている。もしも夜が暗黒の闇であったなら、かえってホプキンスの決意はし易かったであろう。灰色という色が、「どちらを選ぶか」という苦しみ、言い換えれば、改宗前の ‘[t]he torments of indecision’¹² を表していると考えられよう。

次に、芥子の花の色のような鮮やかな朝焼けが描かれる。灰色のまま朝を迎えた雑木林と対照的なのだが、この美しさは、実は不吉な影を帯びている。

‘A crimson East, that bids for rain.
So from the dawn was ill begun
The day that brought my lasting pain
And put away my sun.
But watching while the colour grew
I only feared the wet for you
Bound for the Harbour and your crew.

天気は通常西から変わる為、その美しい深紅の夜明けは必ずしもその日の好天を予言するものとは限らない。本来ならば、新しい一日の始まりである朝は喜びに満ち、それも晴れた朝焼けであればなおさら希望に満ちるはずであるが、ここでは正反対の雨天を予告する。喜びの向こうの悲しみや苦しみを思わせるこの表現にも、彼の信仰上の揺れを感じる。カトリックへの改宗は、自分の思う道を進むことであるから、希望に満ちた新しい世界の始まりに違いないが、行く手には厳しい信仰生活を覚悟しなくてはならない。彼の美の追究を諦めなくてはならないかもしれない。また、国教会に属する家族との精神的な別れ、言い換えれば、生まれて以来、迷いもなく生きて来た自分の過去との決別という苦しみを経験することになる。喜びと苦しみとが複雑に、言わば「まだら」に混ざり合うのは、彼の一生を通しての生き様であったとも言える。

船乗りの妻は、いつの間にか眠りに落ち、目覚めると繊細な音色に囲まれているのに気付く。

‘I did not mean to sleep, but found
I had slept a little and was chill.
And I could hear the tiniest sound,
The morning was so still—
The bats' wings lisp as they flew
And water draining through and through

The wood : but not a dove would coo.

音楽の才能も豊かであったホブキンスが描写する、この小さな音の重なりが束の間の平和を醸し出す。そこにナイチンゲールの激しい鳴き声が聞こえて来る。それまで静けさが漂い、小さな物音（コウモリの羽音、小川の水音）が聞こえていたのだが、突然聞こえてくるナイチンゲールの声はあまりにも力強く、ホブキンスの心を揺さぶる。本来ならば、あまり見かけない珍しい鳥であるはずのナイチンゲールの鬼気迫る鳴き声が、船乗りの足音を消してしまう。マッケンジーは、この足音を ‘his[the husband’s] returning footsteps’ と解釈しているが⁽¹³⁾、物語の流れから言って、これは出掛ける時の足音であろう。

‘You know you said the nightingale
In all our western shires was rare,
That more he shuns our special dale
Or never lodges there :
And I had thought so hitherto—
Up till that morning’s fall of dew,
And now I wish that it were true.

‘For he began at once and shook
My head to hear. He might have strung
A row of ripples in the brook,
So forcibly he sung,
The mist upon the leaves have strewed,
And danced the balls of dew that stood
In acres all above the wood.

‘I thought the air must cut and strain
The windpipe when he sucked his breath
And when he turned it back again
The music must be death.
With not a thing to make me fear,
A singing bird in morning clear
To me was terrible to hear.

‘Yet as he changed his mighty stops
Between I heard the water still
All down the stair-way of the copse
And churning in the mill.
But that sweet sound which I preferred,
Your passing steps, I never heard
For warbling of the warbling bird.’

ここで、荒波狂う海へと自らの意思で出港し、波に洗い流され海に落ちて命を絶つ船乗りである夫は、英国国教会を離れ、カトリック信仰を得る姿を象徴し、その彼が出かける足音を聞かず、彼を失う妻は、英国国教会の信仰に取り残された姿を表現しているであろう。この意味で、ナイチンゲールにかき消される繊細な音は、これまでの信仰に付随する家族や友人などの人間関係、学問、詩作などホブキンス自身の生きてきた道を表すと考えられよう。晴れやかな朝に鳴いている鳥に感じる恐怖は、晴れやかな夜明け

が雨の兆しであることと共通し、喜びの向こうの苦しみを予感させる。

夫ルカは、海で命を落とす。つまり、「あちら側」（英国国教会から見て、ローマ・カトリック教会という敵対側）に行くのであり、後に改宗するホブキンスを彷彿とさせる。従って、妻フランシスがうとうとしながら、「百合の首」を低く静めて横たわる姿は、改宗という積極的な行動の対極的立場にある、純粹で敬虔な英国国教徒としてのホブキンスの家族を表していると考えられる。更に「まどろみ」が、ホブキンスの改宗に際しての家族の油断を表すと解釈できよう。

Thus Frances sighed at home, while Luke
Made headway in the frothy deep.
She listened how the sea-gust shook
And then lay back to sleep.
While he was washing from on deck
She pillowing low her lily neck
Timed her sad visions with his wreck.

後に書かれた「ドイッチェランド号の難破」の第 24 連にも、平穏な世界と死の世界の隔たり、対比を表現する箇所がある。

Away in the loveable west,
On a pastoral forehead of Wales,
I was under a roof here, I was at rest,
And they the prey of the gales ;
She to the black-about air, to the breaker, the
thickly
Falling flakes, to the throng that catches and
quails
Was calling ‘O Christ, Christ, come quickly’ :
The cross to her she calls Christ to her, christens
her wild-worst Best.

ナイチンゲールは、古来、文学において、二つの異なった描かれ方をしている。たとえば、ミルトン（John MILTON）のソネットに ‘Thou with fresh hope the lover’s heart dost fill,/ While the jolly Hours lead on propitious May’⁽¹⁴⁾ とあるように、恋人達と関連付けられる。それは、雲雀のように明るい昼間ではなく、夜な夜な美しい声でさえずる様子から当然のことであろう。しかし、一方でナイチンゲールを悲しいギリシャ神話と結び付ける詩もある。フィリップ・シドニー（Philip SIDNEY）の詩もその一つである。

The Nightingale, as soone as Aprill bringeth
Unto her rested sense a perfect waking,
While late bare earth, proud of new clothing
springeth,
Sings out her woes, a thorne her song-booke
making :
And mournfully bewailing,
Her throate in tunes expresseth
What grieffe her breast oppresseth,
For Thereus’ force on her chaste will prevailing.

O Philomela faire, o take some gladnesse,
That here is juster cause of plaintfull sadnesse :
Thine earth now springs, mine fadeth,
Thy thorne without, my thorne my heart
invadeth.¹⁵⁾

トラキアの王、テーレウスは、妻プロクネーの妹ピロメラーに恋をし、彼女を凌辱するのみならず、彼女の舌をくり抜いて自分の悪事が明かされぬよう謀った。しかしピロメラーはその一部始終を織物に織り込み、姉に訴える。そして、姉妹は復讐の為にテーレウスとプロクネーの間の息子の命を奪う。事の次第を知り、怒ったテーレウスが姉妹に切りつけようとしたその時、ゼウスがプロクネーをナイチンゲールに、ピロメラーを燕に変え、2人は空へと飛んで行くのである。この神話から、ナイチンゲールの声の特異性を、舌を抜かれている為と解釈し、悲しみを歌う鳥だとする詩人達がいる。

ホプキンスがキーツ (John KEATS) の作品から影響を受けるようになったのは、ハイゲートの中学時代に詩人ディクソンを通してであった。ホプキンスの愛読書の中にキーツの詩集が入っていたばかりか、この頃書いた「エスコリアル」を初めとして、「人魚の幻想」(“A Vision of the Mermaids”), 「天国の港」(“Heaven-Haven”), 「完徳の習慣」(“The Habit of Perfection”) にキーツの影響を明らかに見て取れる。従って彼が、キーツの代表作「ナイチンゲールに寄せるオード」(“Ode to a Nightingale”) を意識していなかったはずがない。各連10行の8連から成るこのオードは、iambic pentameterの重厚な荘重さが漂っている。初夏の喜びを歌うナイチンゲールと共に暗い森の中へ消えて、この世の苦悩やいら立ち、悲しみを忘れたいという気持ちから、次第に死への憧れへと変わってゆく。

Darkling I listen ; and, for many a time
I have been half in love with easeful Death,
Call'd him soft names in many a mused rhyme,
To take into the air my quiet breath ;
Now more than ever seems it rich to die,
To cease upon the midnight with no pain,
While thou art pouring forth thy soul abroad
In such an ecstasy!
Still wouldst thou sing, and I have ears in vain—
To thy high requiem become a sod.¹⁶⁾

ホプキンスの作品には鳥が様々に謳われているが、絵画と音楽の才能が豊かであった彼らしく、その姿や鳴き声を描き、それが心理描写に結び付けられている。初期の詩の中でも、「都市の錬金術師」(“The Alchemist in the City”) では、自由に飛び交う鳩や燕の群れに注目し、「(神様、あなたの周りを飛ぶ鳥にして下さい)」(“Let me be to Thee as the circling bird,”) では、神の周りを飛び交う鳥やコウモリになりたいと謳う。シーランド (John SELAND) が言うように、そこには自分の成長と神との一致への欲求が読み取れる¹⁷⁾。ブライツソネットの中の「海と雲雀」(“The Sea and the Skylark”) では、その音色の美しさと、現実の汚れた世の中を対比させ、「空に舞う鷹」(“The

Windhover”) では、鷹の雄姿を称えつつ、我が身を振り返り、気後れと共に動揺を抑えきれない。

雲雀は朝の鳥、ナイチンゲールは夜の鳥で、雲雀の明るいイメージに比べると、ナイチンゲールは、影のあるイメージである。羽の色はくすんでいるのだが、声が特徴的である。それは、美しい鳴き声とも言われるが、一方、悲しげな声とも言われる。作品「ナイチンゲール」は、夫を思う妻の気持ちを謳う詩でありながら、最後に死別が宣告されており、ナイチンゲールを悲しみや死と結び付けている。「それ(その歌声)を聞く人には、確信・頼もしさ・楽しい期待などに満ちているし、また、その長く引つ張る調べの中には、嘆願するような、やさしい情熱が溢れるほど一杯あるが、時々思う存分気紛れに歌ったかと思うと、音楽的技術を意識的に見せびらかすようなこともある。どんな苦痛や悲しみがその歌によって表現されようとも、それは理想化された悲しみである。」¹⁸⁾と言われるナイチンゲールの鳴き声を、ホプキンスはキーツと同じく、この「死別」への鎮魂歌として用いている。この作品は一種の「レクイエム」、つまり、自分の家族や友人や英国国教会との決別の強い気持ちを表している。言いかえれば、国教会との決別の苦しみ、カトリックとの出会いの苦しみの両者乗り越える決意が感じられると言えよう。この詩にナイチンゲールの鳴き声を織り込んだところに、メタファーの詩人としてのホプキンスの技量が発揮されているのだが、ホプキンスは、この作品の6ヶ月後に、ローマ・カトリックへの改宗の最終的な決意をし、10月にニューマンの導きによってカトリック教会に迎えられる。

テキスト

Gerard Manley HOPKINS, *The Poems of Gerard Manley Hopkins*, ed. by W.H. GARDNER and N.H. MACKENZIE, 4th ed. (London : Oxford University Press, 1967).

ホプキンスの詩の引用はここからのものである。

注

- 1) K.R. Srinivasa IYENGAR, *Gerard Manley Hopkins — The Man and the Poet*— (New York : Haskell House Publishers Ltd., 1971), p. 24.
- 2) 緒方登摩, 『ホプキンスのかなしみ』(京都 : 山口書店, 1988), p. 81.
- 3) 同書, pp. 81-2.
- 4) 同書, p. 46.
- 5) 安田章一郎, 『G. M. ホプキンス研究』(京都 : 清水弘文堂書房, 1968), p. 30.
- 6) 木鎌安雄, 『ホプキンスのキリスト教』(東京 : 南窓社, 1994), p. 26.
- 7) Gerard Manley HOPKINS, *The Journals and Papers of Gerard Manley Hopkins*, ed. by Humphry HOUSE (London : Oxford University Press, 1959), p. 71. (Journal : November 6, 1865)
- 8) *Ibid.*, p. 72. (Journal : January 23, 1866)
- 9) Norman H. MACKENZIE, *Hopkins* (London : Oliver and Boyd, 1968), p. 11.
- 10) W.H. GARDNER, *G.M. Hopkins* (London : Oxford University Press, 1969), p. 88.
- 11) Paul L. MARIANI, *A Commentary on the Complete Poems of*

- Gerard Manley Hopkins* (Ithaca : Cornell University Press, 1970), p. 35.
- 12) MACKENZIE, *op. cit.*, p. 12.
 - 13) Norman H. MACKENZIE, *A Reader's Guide to Gerard Manley Hopkins* (Ithaca : Cornell University Press, 1981), p. 19.
 - 14) John MILTON, *Milton—Poetical Works—*, ed. by Douglas BUSH (London : Oxford University Press, 1966), p. 78.
 - 15) Philip SIDNEY, *The Poems of Sir Philip Sidney*, ed. by William A. RINGLER, Jr. (Oxford : The Clarendon Press, 1962), p. 137.
 - 16) John KEATS, *Keats—Poetical Works—*, ed. by H.W. GARROD (London : Oxford University Press, 1956), p. 208.
 - 17) ジョン・シーランド, 「ホブキンの詩における鳥のイメージ」—『ホブキンの世界』ピーター・ミルワード, 緒方登摩編 (東京 : 研究社出版, 1990), p. 87.
 - 18) A.C. DOWNER 著 岡地嶺訳, 『キーツのオード研究』 (東京 : 文修堂, 1963), p. 35.

G.M. Hopkins' Conversion to Catholicism

—Through “The Nightingale”—

By

Akiko TERAMOTO*

(Received August 5, 2009/Accepted December 4, 2009)

Summary : In the 19th century, Victorian England enjoyed tremendous prosperity due to the Industrial Revolution, but it also had harmful influences not only on economy and society but also on religion in general. This social situation caused the Oxford Movement in 1833. This was the movement to reform the Church of England by restoring religious activities. Eventually it ended in failure, but HOPKINS as an Oxford student was influenced by E.B. PUSEY and H.P. LIDDON, the main members of the Movement. Furthermore, by reading J.H. NEWMAN's *Apologia Pro Vita Sua*, HOPKINS seems to have been drawn gradually toward Catholicism. In 1866 he was baptized by NEWMAN to be a Catholic, and later joined the Society of Jesus, which had extremely hard trainings and disciplines.

HOPKINS' early poems show his belief in the Church of England which was fostered in his family, and as time goes on, the trend of his poems changes : that is, they show his religious torment derived from his inclination toward Catholicism. Among them is “The Nightingale”. I will elucidate HOPKINS' religious sentiments by scrutinizing the ballad narrative of a wife whose sailor husband drowns in a stormy sea.

Key words : the Industrial Revolution, the Oxford Movement, Catholicism, conversion, nightingale

* Foreign language studies (English), Faculty of Applied Bio-Science, Tokyo University of Agriculture